関西大学心理学研究　2018 年　第 9 号　pp.59-66

大学生における自閉スペクトラム症傾向，メタ認知，コミュニケーション・スキルの関連

前　田　由貴子　関西大学大学院心理学研究科，大阪国際大学学生相談室
佐　藤　　寛　関西学院大学文学部

The Relationship Among Autistic Traits, Metacognition, and Communication Skills in University Students

Yukiko MAEDA (Graduate School of Psychology, Kansai University, Student Counseling Office, Osaka International University)
Hiroshi SATO (School of Humanities, Kwansei Gakuin University)

This study aims to investigate the relationship among autistic traits, metacognition, and communication skills. Three-hundred and nine undergraduate students completed the Autism-Spectrum Quotient (AQ); the ENDCOREs scale, which measures general communication skills; and the Adults' Metacognition Scale. We used Structural equation modeling to evaluate the hypothetical model. Autistic traits had a significant negative effect on metacognition and communication skills. Metacognition had a significant positive effect on communication skills. These results suggest that autistic traits negatively affected communication skills directly and indirectly via metacognition. Further, these results suggest that undergraduate students with autistic tendencies tend to have low communicative and metacognitive abilities. This study suggests that autistic students' poor metacognition is a mediator of communicative difficulties.

Keywords: autistic traits, metacognition, communication skills, university students

目　的

日本学生支援機構（2015）の調査では，全国の大学に在籍する障害学生のうち，約 11％が高機能自閉症等（アスペルガー症候群を含む）の自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD）に含まれる学生であるとされている。日戸（2014）によれば，ASD の大学生は進学や就職というライフステージの変化に伴い，人間関係によるストレスの対処など発達的課題が生じやすいとされている。

DSM-5 によれば，ASD は「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」と「限定された反復する様式の行動，興味，活動」の 2 領域の症状によって特徴づけられる（American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経医学会，2014）。上述のような ASD の大学生にみられる発達的課題の背景には，ASD に特有の社会的コミュニケーションの問題が関与している可能性がある。すなわち，ASD の大学生は相手の表情や意図を読み取ることや，場の雰囲気を読むことが困難であるため，会話においても双方向のコミュニケーションが成立せず，場の共有という要素が抜け落ちてしまう。そ

の結果として，話題の中心が常にずれた状況で会話が続き，話がかみ合わないなどの問題が起こりやすい（杉山，2002）。このような社会的コミュニケーションの問題は，ASDの大学生の学生生活において重大な不利益をもたらすことが指摘されている。例を挙げると，授業において協調性が求められるペアワークがこなせない，場にそぐわない発言により周囲から奇異だと捉えられて孤立してしまう，異性に不適切な働きかけをすることでストーカー扱いを受けるといった問題が指摘されている（岩田，2011）。

青年期のASDにおける社会的コミュニケーションの問題には，ソーシャルスキルトレーニング（Social Skills Training, 以下SST）の有効性が示されている。たとえば中島・鈴木・丸山（2015）は，ASDの大学生を含む学生相談室の来談者を対象にSSTを実践し，ソーシャルスキルの自己評定・他者評定がいずれも上昇したことを報告している。また山本・香美・小椋・井澤（2013）は，ASDの基準を満たす19歳から27歳までの青年に対してSSTを行い，標的とされたソーシャルスキルのほとんどの評価得点が上昇したことを示している。一方，青年期のASDに対するSSTの課題として，効果が持続的に続かないことが指摘されている。山本他（2013）は前出したASDの青年に対するSSTの効果研究において，介入直後の時点では改善が認められていたソーシャルスキルが，介入から時間が経過するにつれて低下することを報告している。これらのことから，ASDの青年を対象としたSSTには一定の効果があるものの，効果の持続性という点を考慮すると従来のSSTの手続きを何らかの形で改善する必要があると考えられる。

SSTの効果を長期的に持続させるための付加的な介入への示唆として，単なるソーシャルスキルの獲得に留まらず，メタ認知の水準から新たなソーシャルスキルを自発的に学習する能力を身につけることの重要性が指摘されている（米田，2009）。安藤・栗田・熊谷（2015）は，ASDの青年に対してSSTを実施し，対象者が自己の能力をより客観的に評価できるようになった要因として，メタ認知機能が改善されたことを示唆している。メタ認知とは自分で自分の心的状態を認識する心理機構であり，状況に適応できるように自己調整を図ったり，適応できるように状況を作り替えることを可能にするものである（丸野，2007）。メタ認知の重要性は社会的コミュニケーションにおいても指摘されており，Sawyer, Williamson, & Young（2014）は，他者の感情を適切に判断するためには，メタ認知が機能することが重要であることを述べている。

以上のような観点に立つと，ASDにみられる社会的コミュニケーション問題の背景として，メタ認知が十分に機能していない可能性が推測される。児童を対象とした研究では，ASD児は定型発達児よりもメタ認知機能に困難が認められることが報告されており（玉木・海津，2012），成人を対象としたWilliams & Lind（2014）の調査においても，同様の結果が示されている。大学生のASDにおいても同様にメタ認知の機能不全が認められるとすれば，社会的コミュニケーションの問題の背景にメタ認知の問題が介在していることが推察される。

なお自閉スペクトラム症の概念は，ASDと健常者との連続性が仮定されている。神尾・森脇・武井・稲田・井口・高橋・中鉢（2013）は，ASDの評価尺度として妥当性が示されている対人応答性尺度を用いて，通常学級に通う児童生徒22529名を対象に，自閉症状が一般児童集団内でどのような分布を示すのかについて調査を行った。調査の結果によると，対人応答性尺度のスコア分布は不連続点を持たずなめらかな分布を示し，ASD群を区別するギャップが見られなかったことが報告されている。このことは，ASDに特異的な自閉症状および自閉的行動特性が，自閉症スペクトラムという1つの行動次元上に連続的に分布することを示しており，ASD特性を一定以上持つと社会適応が困難になり，代償スキルの獲得が行われない場合は，QOLを低下させる要因となり得ることを示唆している（神尾他，2013）。ASD的な行動特性が連続的に分布することは，ASD傾向を測定する自己記述式の質問紙であるAQ（Autism-spectrum Quotient: AQ, Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin & Clubley, 2001）でも述べられており（Baron-Cohen et al., 2001），健常者を対象としてASD傾向を測定することによって，ASDのアナログ研究が実施できる可能性も示唆されている（若林，2003）。

以上のような観点から本研究では，大学生を対象とした調査研究を行い，ASD傾向，メタ認知，コミュニケーション・スキルの変数間の関連を明らかにすることを目的とした。

方　法

調査対象者

関西圏の私立大学に在籍する大学生 453 名（男性 303 名，女性 150 名，平均年齢 21.12 歳，標準偏差 1.91 歳）を調査の対象とした。

調査時期および調査方法

2015 年 1 月に調査を実施した。調査は大学の講義終了後の時間を利用して行われ，無記名の質問紙を集団配布して回答を求めた。

質問紙

1. AQ 日本語版（Autism-spectrum Quotient : AQ, Baron-Cohen et al., 2001；若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright，2004）を使用した。原版の AQ は 50 項目から構成される自己回答式の尺度であり，健常範囲の知能を持つ成人の自閉症傾向を測定できる。回答は 4 件法で求められ，各項目につき自閉症傾向が高いとされる側から 2 つの選択肢を選んだ場合には 1 点が，低いとされる側から 2 つの選択肢を選んだ場合には 0 点として得点化した。下位尺度は，「社会的スキル」「注意の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」の 5 つである。項目例は，社会的スキル（新しい友人をつくることはむずかしい），注意の切り替え（新しい場面（状況）に不安を感じる），細部への注意（数字に対するこだわりがある），コミュニケーション（冗談がわからないことがよくある），想像力（小説のようなフィクションを読むのは，あまり好きではない）などである。高得点ほど ASD の傾向を強く示しており，診断的妥当性および健常者の個人差の測定尺度として，一定の妥当性を持つとされている（若林他，2004）。

2. ENDCOREs（藤本・大坊，2007）は，コミュニケーション・スキルを言語能力から対人能力にわたる 6 種類のスキルからなる複合概念として測定する尺度である。自己統制，表現力，解読力，自己主張，他者受容，関係調整の 6 因子 24 項目で構成されており，回答は 7 件法で求められる。「かなり苦手（1 点）」「苦手（2 点）」「やや苦手（3 点）」「ふつう（4 点）」「やや得意（5 点）」「得意（6 点）」「かなり得意（7 点）」で得点化を行った。項目例は，自己統制（まわりの期待に応じた振る舞いをする），表現力（自分の考えを言葉でうまく表現する），解読力（相手の考えを発言から正しく読み取る），自己主張（会話の主導権を握って話を進める），他者受容（相手の意見や立場に共感する），関係調整（人間関係を第一に考えて行動する）などである。高得点ほどコミュニケーション・スキルが高いことを示し，Kiss18 や自尊感情尺度との間で妥当性が支持されている（藤本・大坊，2007）。

3. 成人用メタ認知尺度（阿部・井田，2010）は，Schraw & Dennison（1994）によって開発された Metacognitive Awareness Inventory の日本語版であり，「モニタリング」「コントロール」「メタ認知的知識」の 3 因子からメタ認知を測定することが可能である。28 項目から構成されており，評定は 6 件法で行われる。「全くあてはまらない（1 点）」「あまりあてはまらない（2 点）」「ややあてはまらない（3 点）」「ややあてはまる（4 点）」「だいたいあてはまる（5 点）」「とてもよくあてはまる（6 点）」で得点化を行った。成人用メタ認知尺度は，先行研究において信頼性が示されているものの，妥当性は示されていない（阿部・井田，2010）。そのため，確認的因子分析を行った結果，適合度指標は $x^2 = 444.45$, $p < .001$, GFI = .91, AGFI = .88, CFI = .95, RMSEA = .042 であり，因子的妥当性の高さが示された。項目例は，モニタリング（意識的に立ち止まり，自分の理解を確認する），コントロール（理解できないときには，やり方を変えてみる），メタ認知的知識（過去にうまくいったやり方を試みている）などである。高得点ほどメタ認知能力が高いことを示す。

倫理的配慮

本研究は研究実施機関の倫理委員会による承認を受けている。調査への回答は任意であり，回答の内容などによる不利益を被ることはないこと，結果は統計的に処理し外部に漏洩することはない旨を書面にて対象者に説明し，回答が得られたことをもって参加同意が得られたものとした。

統計処理

統計解析は，IBM SPSS Amos ver.22 を用いた。

結　果

分析対象者

質問紙に記入漏れ・記入ミスのあった対象者を除

いた 309 名（有効回答率 68.2%，男性 199 名，女性 110 名，平均年齢 20.98 ± 1.80 歳）を分析対象者とした。

各尺度の記述統計量の算出

本研究で用いた AQ, ENDCOREs，成人用メタ認知尺度の下位尺度得点の平均値と標準偏差を示した（Table 1）。AQ の合計得点は，若林他（2004）の大学生群と比べて高く，特に女性の合計得点が高いことが示された。

各尺度の合計得点に関して，*t* 検定を用いて男女比較を行った結果，全ての尺度で有意な差はみられなかった。（AQ: $t=1.87$, $df=307$, *n.s.*; ENDCOREs: $t=1.29$, $df=307$, *n.s.*; 成人用メタ認知尺度 : $t=0.49$, $df=307$, *n.s.*）。このことから，以下の分析では男女のデータを総じて検討を行った。

なお，AQ のカットオフポイントである 33 点以上を基準に，カットオフポイントを上回る学生の割合を算出したところ，3.6%（11 名）であった。

ASD 傾向，コミュニケーション・スキル，メタ認知の関連

AQ, ENDCOREs，成人用メタ認知の各下位尺度得点間で，相関係数を算出した（Table 2）。

その結果，AQ の「社会的スキル」「注意の切り替え」,「コミュニケーション」,「想像力」, ENDCOREs の各下位尺度，成人用メタ認知尺度の各下位尺度において，それぞれ中程度から弱い負の相関がみられた。

次に，ASD 傾向とメタ認知がコミュニケーション・スキルに与える影響を検討するために，構造方程式モデリングによる解析を行った。パラメータ推

Table 1　本研究で用いられた尺度の平均得点と標準偏差

	男性（$n=199$）		女性（$n=110$）		全体（$N=309$）	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*M*	*SD*
自閉スペクトラム症傾向						
社会的スキル	3.90	2.33	4.59	2.45	4.15	2.40
注意の切り替え	5.02	1.89	5.56	1.82	5.21	1.88
細部への注意	4.78	1.99	5.04	2.21	4.88	2.07
コミュニケーション	4.01	2.16	4.05	2.09	4.02	2.13
想像力	3.84	1.71	3.40	1.74	3.68	1.73
メタ認知						
メタモニタリング	38.44	9.16	38.08	9.79	38.31	9.37
メタコントロール	34.13	7.40	35.18	7.27	34.50	7.36
メタ認知的知識	33.01	6.34	33.48	5.79	33.18	6.15
コミュニケーション・スキル						
自己統制	17.82	4.50	17.66	4.05	17.76	4.34
表現力	16.10	4.89	15.25	4.68	15.80	4.82
解読力	18.53	5.17	17.99	4.32	18.34	4.88
自己主張	16.46	4.88	14.77	4.18	15.86	4.71
他者受容	19.22	4.74	19.88	4.16	19.45	4.54
関係調整	18.47	4.37	17.77	4.29	18.22	4.35

Table 2　本研究で用いられた尺度の相関係数

	自閉スペクトラム症傾向					メタ認知		
	社会的スキル	注意の切り替え	細部への注意	コミュニケーション	想像力	メタモニタリング	メタコントロール	メタ認知的知識
メタ認知								
メタモニタリング	−.34**		.30**	−.24**	−.31**			
メタコントロール	−.30**		.22**	−.20**	−.33**			
メタ認知的知識	−.35**			−.27**	−.46**			
コミュニケーション・スキル								
自己統制	−.34**	−.29**	.25**	−.40**	−.37**	.38**	.37**	.42**
表現力	−.56**	−.34**	.26**	−.51**	−.33**	.37**	.31**	.26**
解読力	−.45**	−.34**	.28**	−.52**	−.47**	.34**	.38**	.38**
自己主張	−.53**	−.40**	.22**	−.43**	−.25**	.50**	.41**	.30**
他者受容	−.46**			−.36**	−.33**	.24**	.33**	.41**
関係調整	−.54**	−.22**	.20**	−.39**	−.33**	.33**	.32**	.33**

**$p<.01$

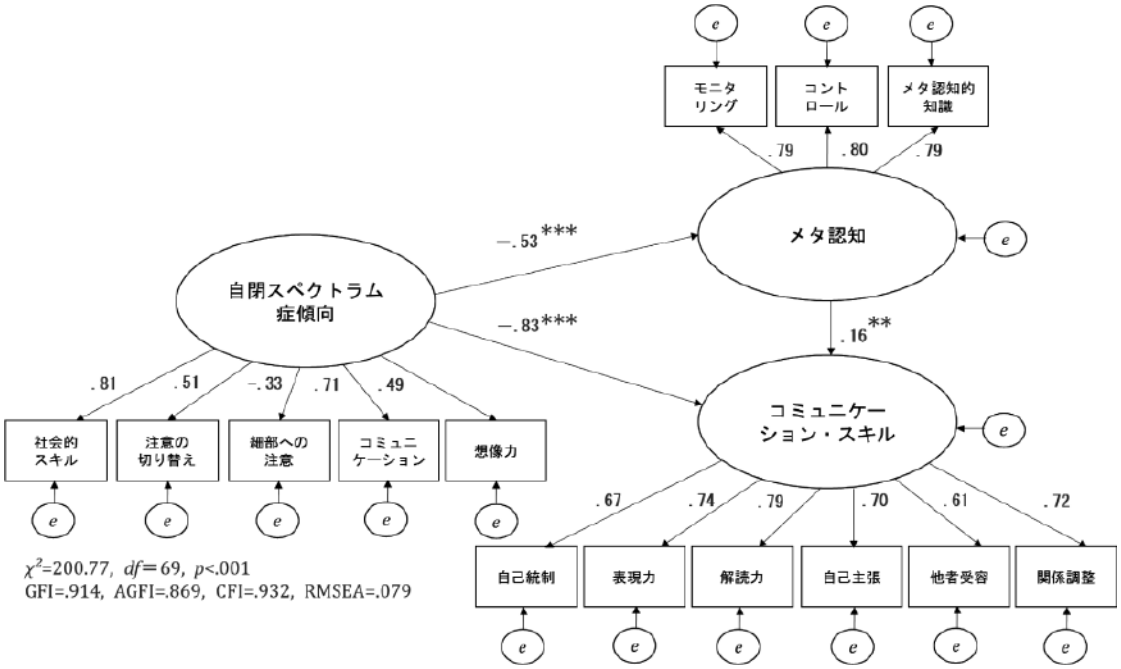

Figure 1　自閉スペクトラム症傾向とコミュニケーション・スキルのメタ認知媒介モデル（** p<.01，*** p<.001）

定には最尤法を用いた。モデルの作成にあたっては，ASD 傾向がコミュニケーション・スキルに直接向かう経路と，メタ認知を媒介する経路を仮定した。修正指数に基づき，x^2 値の改善度が 2 以上であった場合には誤差間に共変を仮定してモデルの修正を行った。分析の結果，モデル適合度は x^2=200.08, p<.001, GFI=.91, AGFI=.87, CFI=.93, RMSEA=.079 であり，ある程度の妥当性が示された。最終モデルを Figure 1 に示す。Figure 1 には潜在変数，観測変数，標準化係数を記載しており，誤差変数間の共変関係は省略している。

分析の結果，ASD 傾向からメタ認知に対して有意な負のパスが示された（β=−.53, p<.001）。ASD 傾向からコミュニケーション・スキルに対しても，同様に有意な負のパスが認められた（β=−.83, p<.001）。加えて，メタ認知からコミュニケーション・スキルへの正のパスが有意であった（β=.16, p<.01）。以上の点から，ASD 傾向がコミュニケーション・スキルに与えるネガティブな影響には，ASD 傾向から直接的に影響している部分と，メタ認知を媒介として間接的に影響を及ぼしている部分が存在することが示唆された。

考　察

本研究の目的は，大学生を対象に，ASD 傾向，メタ認知，コミュニケーション・スキルの関連について検討することであった。

構造方程式モデリングによる解析の結果，（a）ASD 傾向が高い大学生は，コミュニケーション・スキルとメタ認知が共に低くなること，（b）メタ認知が低くなるとコミュニケーション・スキルも低くなることから，ASD 傾向の大学生が抱えるコミュニケーションの問題にはメタ認知が介在している可能性があること，といった知見が得られた。

本研究の結果から，ASD 傾向が高い大学生ではメタ認知やコミュニケーション・スキルが低いことが推測される。高橋・玉木・山脇（2012）は，ASD 傾向と社会的スキルの関連について検討しており，ASD 傾向が高い学生は社会的スキルが低いことを示している。玉木・海津（2012）は，ASD 児が「問題解決に向けて自主的に活動する」，「見通しを立てる」などのメタ認知が必要とされる実行機能に困難を抱えることを指摘している。しかし，ASD 傾向とメタ認知とコミュニケーション・スキルの関連について検討を行った研究はこれまでに報告されておらず，本研究は ASD 傾向が高い大学生が抱えるコミュニ

ケーションの問題の背景を理解する上で新しい知見をもたらすものであると言える。

また，本研究ではコミュニケーション・スキルにメタ認知が関与する可能性が示された。コミュニケーションにおけるメタ認知の重要性は様々な先行研究が指摘している。たとえば，石井（2006）は状況や関係性に応じてコミュニケーションスタイルを変化させる背景にメタ認知が影響を与えていることを示唆している。また谷口（2010）は，コミュニケーション教育の目標をメタ認知能力の育成として捉え，自己のコミュニケーションをモニタリングし，それに基づいてことばや行為をコントロールすることの重要性を示している。本研究の結果はこれらの先行研究と一致したものであり，良好なコミュニケーションを行う上でメタ認知が重要な役割を果たしている可能性を改めて示したものであると言える。

一方で，ASD 傾向の高い学生はメタ認知機能に問題を示しがちである可能性がある。Williams（2010）は ASD を抱える人が自己認識に関するメタ認知機能に困難を抱えることを指摘しており，Sawyer et al.（2014）は，彼らのソーシャルスキル行使が不十分である背景にメタ認知機能の不全を挙げている。また，他者の心的状態を推測する認知能力である「心の理論」にはメタ認知的行動が必要とされ（渡邊，2008），他者との社会的相互作用の中で重要視される心のはたらきであるが，ASD の人々は他者の意図を読み取ることが特に困難である（苧阪，2014）。本研究においても ASD 傾向はメタ認知に対して抑制的に働くことが示唆されており，ASD 傾向の高い大学生がメタ認知機能の困難も抱えることでコミュニケーションの問題をより深刻にしているという実態が見てとれる。Sawyer et al.（2014）は，他者の感情を適切に判断するためには，メタ認知的活動であるモニタリングが機能することが重要であることを述べている。また，Grainger, Williams & Lind（2014）は，ASD 者のメタ認知のモニタリング機能が十分に働いていない可能性を示唆している。これらの知見を踏まえると，コミュニケーション・スキルに影響を及ぼすメタ認知の要素として，モニタリングが重要であることがうかがわれる。今後は，コミュニケーション・スキルに影響を与えるメタ認知の要素の同定が求められる。

最後に本研究の限界と今後の課題を述べる。本研究では，ASD 傾向，メタ認知，コミュニケーション・スキルの把握に自己記入式の質問紙を使用しており，情報源が自己評定のみに限定されている。メタ認知機能に困難がみられる対象者は，内省的な自分の認知過程を正確に捉えられず，回答の正確さが低下することが懸念されるため，行動指標や他者評価に基づく客観的な方法によって査定することが望まれるとともに，複数の大学の学生を対象にしたデータを検討することが必要である。また，メタ認知尺度は信頼性と妥当性の検証が十分に確保されていない。そのため，本研究の結果の解釈は慎重に行うべきである。さらに，メタ認知尺度の項目内容が学習場面に大きく依存しているため，コミュニケーション・スキルに関連するメタ認知機能を十分に把握していない可能性が示唆される。メタ認知は学習との関連研究が多く（阿部・井田，2010），社会的文脈におけるメタ認知を測定する尺度の開発は行われていない。今後は，社会的文脈に関連したメタ認知尺度を用いることで，より詳細な検討が可能になると考えられる。

次に，本研究ではメタ認知の脆弱性について，ASD の観点から議論している。しかし，メタ認知の脆弱性は，知的障害や注意欠如・多動性障害にも認められることが示されている（田中，2008）。そのため，メタ認知がコミュニケーション・スキルに及ぼす影響については，これらの障害別に検討を行うことが必要である。

また，メタ認知がコミュニケーション・スキルに与える影響は，ASD 傾向から直接コミュニケーション・スキルに与えている影響と比較して，相対的に小さいことに留意しなければならない。ASD 傾向からコミュニケーション・スキルに影響を与える要因には，メタ認知以外の媒介変数が関与していることが示唆される。したがって，コミュニケーションに影響を与える要因を多面的に検討することが重要である。

引用文献

阿部真美子・井田政則（2010）．成人用メタ認知尺度の作成の試み ── Metacognitive Awareness Inventory を用いて ──　立正大学心理学研究年報，*1*，23-34.

American Psychiatric Association.（2013）．*Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th edition*（*DSM-5*）．Washington, DC.: American Psychiatric Publishing.（日本精神神経医学会（監修）

（2014）．DSM-5 ── 精神疾患の診断・統計マニュアル ──　医学書院）

安藤瑞穂・栗田房子・熊谷恵子（2015）．自閉症スペクトラム障害のある成人におけるソーシャルスキルトレーニングのメタ認知に対する影響　教育相談研究，*52*，57-66.

Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin,J., & Clubley, E.（2001）. The Autism-Spectrum Quotient（AQ）: Evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, *31*, 5-17.

藤本　学・大坊郁夫（2007）．コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み　パーソナリティ研究，*15*，347-361.

Grainger, C., Williams, D. M., & Lind, S.（2014）. Metacognition, metamemory, and mindreading in high-functioning adults with autism spectrum disorder. *Journal of Abnormal Psychology*, *123*, 650-659.

石井佑可子（2006）．社会的スキル研究の現況と課題 ── 「メタ・ソーシャルスキル」概念の構築へ向けて ── 京都大学大学院教育学研究科紀要，*52*，347-359.

岩田淳子（2011）．大学生の発達障害　精神医療第 4 次，*61*，36-42.

神尾陽子・森脇愛子・武井麗子・稲田尚子・井口英子・高橋秀俊・中鉢貴行（2013）．未診断自閉症スペクトラム児者の精神医学的問題　精神神経学雑誌，*115*，601-606.

丸野俊一（2007）．適応的なメタ認知をどう育むか　心理学評論，*50*，341-355.

中島道子・鈴木ひみこ・丸山智美（2015）．1 セッション SST プログラムの実践とその効果 ── 社会性につまずきを抱える大学生グループ（発達障害を含む）を対象に ──　学生相談研究，*35*，230-242.

日本学生支援機構（2015）．大学，短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告.

日戸由刈（2014）．青年期の自閉症スペクトラムの人たちへの発達支援 ── 心理面接のあり方を中心に ──　こころの科学，*174*，57-62.

苧阪直行（2014）．エージェントの意図を推定する心の理論 ── アニメーションを用いた fMRI 実験 ──　苧阪直行（編）　自己を知る脳・他者を理解する脳 ── 神経認知心理学からみた心の理論の新展開（pp. 185-186）新曜社

Sawyer, A. C. P., Williamson, P., & Young, R.（2014）. Metacognitive processes in emotion recognition: Are they different in adults with Asperger's disorder? *Journal of Autism and Developmental Disorders*, *44*, 1373-1382.

Schraw, G., & Dennison, R. S.（1994）. Assessing metacognitive awareness. *Contemporary Educational Psychology*, *19*, 460-475.

杉山登志郎（2002）．高機能広汎性発達障害におけるコミュニケーションの問題　聴能言語学研究，*19*，35-40.

高橋純一・玉木宏樹・山脇望美（2012）．健常大学生を対象とした自閉症スペクトラム指数及び愛着スタイルの個人差と社会スキルとの関連　電子情報通信学会技術研究報告，*112*，17-22.

玉木宗久・海津亜希子（2012）．翻訳版 BRIEF による自閉症スペクトラム児の実行機能の測定の試み ── 子どもの実行機能の測定ツールの開発に向けて ──　国立特別支援教育総合研究所研究紀要，*39*，45-54.

田中道治（2008）．学習の障害とメタ認知　三宮真知子（編）メタ認知 ── 学習力を支える高次認知機能 ──（pp. 169-187）北大路書房

谷口直隆（2010）．「適応的なメタ認知能力」の育成を目指したコミュニケーション教育の提案　国語科教育，*68*，19-26.

若林明雄（2003）．健常者における自閉症スペクトラム仮説の妥当性 ── 大学生の専攻分野と AQ 得点との関係からの検討 ──　自閉症スペクトラム研究，*2*，11-20.

若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S., Wheelwright, S.(2004)．自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版の標準化 ── 高機能臨床群と健常成人による検討 ── 心理学研究，*75*，78-84.

渡邊正孝（2008）．心の理論を支える脳　三宮真知子（編）メタ認知 ── 学習力を支える高次認知機能 ──　p. 221　北大路書房

Williams, D.（2010）. Theory of own mind in autism: Evidence of a specific deficit in self-awareness? *Autism*, *14*, 474-494.

Williams, D. M., & Lind, S. E.（2014）. Metacognition, metamemory, and mindreading in high-functioning adults with autism spectrum disorder. *Journal of Abnormal Psychology*, *123*, 650-659.

山本真也・香美裕子・小椋瑞恵・井澤信三（2013）．高機能広汎性発達障害者に対する就労に関するソーシャルスキルの形成における SST とシミュレーション訓練の効果の検討　特殊教育学研究，*51*，291-299.

米田衆介（2009）．自閉症スペクトラムの人々の就労に向けた SST　精神療法，*35*，318-324.

付記

本研究は大阪国際大学研究倫理委員会の許可を得ている。

本論文は，以下の抄録原稿に，第一著者らが大幅な加

筆・修正を加えて再構成したものである。
Yukiko Maeda, Hiroshi Sato（2016, 6月）The Relationship among Autistic Traits, Metacognition, and Communication Skills in University Students」8th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies.

謝辞

本研究は大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部特別研究費の助成を受けたものである。

利益相反

著者全員がいかなる利益相反もないことを表明する。

著者分担

第 1 著者は本研究を発案し，データ分析，草稿作成を行った。第 2 著者は研究デザインと分析計画に助言を行い，草稿の修正を行った。最終稿の確認は 2 人で行った。

著者紹介

前田由貴子
現在，関西大学大学院心理学研究科博士課程に在籍。大阪国際大学　学生相談室に勤務。
Correspondence concerning to this article should be addressed to Ms. Maeda Yukiko at arbbymuku@gmail.com

佐藤　寛
関西大学社会学部准教授を経て，2016 年より関西学院大学文学部准教授。

要旨

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD）傾向，メタ認知，コミュニケーション・スキルの変数間の関連を明らかにするために，大学生 309 名を対象に AQ, ENDCOREs，成人用メタ認知尺度を用いて調査を実施した。ASD 傾向とメタ認知がコミュニケーション・スキルに与える影響を検討するために，構造方程式モデリングによる解析を行ったところ，ASD 傾向からメタ認知とコミュニケーション・スキルに対して有意な負のパスが示され，メタ認知からコミュニケーション・スキルへ有意な正のパスが示された。このことから，メタ認知が低くなるとコミュニケーション・スキルも低くなり，ASD 傾向の大学生が抱えるコミュニケーションの問題には，メタ認知が介在している可能性が示唆された。

キーワード：自閉スペクトラム症傾向，メタ認知，コミュニケーション・スキル，大学生